

多様性が進む社会の中で生きるための資質・能力を育む社会科学習の在り方  
－第1学年地理的分野「世界各地の人々の生活と環境」における対話と振り返りの工夫を通して－

小林 伸彦

【要約】

多様性が進む社会の中で生きるための資質・能力を育むために、第1学年地理的分野「世界各地の人々の生活と環境」の單元において、対話と振り返りの仕方を工夫して單元を進める実践を行った。單元末に地域で生活されている異質な他者との接点を生み出すために、様々な宗教を信仰されている外国籍の方と対話する場を設定した。單元後に行ったまとめの振り返りには、他者を大切にしながら社会に参画・貢献していこうとしていることが表現されており、多様性が進む社会の中で自分の生き方(ライフスタイル)について内省(自己探究・自己更新)している姿を確認することができた。

【キーワード】多様性, 対話, 單元シート, 振り返り, メタ認知, 自分の生き方(ライフスタイル)  
内省(自己探究・自己実現)

1 主題設定の理由

持続可能な社会を創る資質・能力を育むことをめざして、社会科の学習において実践していくには、どのような学びを創出し、資質・能力を育ていけばよいのだろうか。グローバル化の進行に伴い、持続可能な社会創りに向けて、多文化共生社会の実現、人権の確立、戦争や紛争の抑止、人口問題への対策など、人間が人間として平和で安心して生活できるようにするために、具体的に取り組んでいかなければならない教育的課題が「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)」などにおいてピックアップされている。環境問題のように人間と自然との共存に関わる問題もあれば、人間と人間の間で生じている問題にもスポットが当てられている。

我が国は観光立国をめざし、訪日観光客数は2012年の約840万人から増加の一途をたどり、2018年には約3100万人に到達した。2020年には東京オリンピックとパラリンピックが開催予定となっており、多くの外国籍の人々が訪れることになる。身近な社会においても、就労を目的とした外国籍の人々をコンビニエンスストアなどで見かけることが多くなり、我が国は多様な人々が行き交う社会になってきた。言い換えれば、我が国はグローバル化の進行とともに、多様な民族や宗教が異なる人々が混在する多文化社会に変化してきたといえる。また、日本国籍の人々の中にも、障害のある人や性的指向が自分とは異なる人など、一人一人の人権をより尊重することが求められている。同じ民族であってもそれぞれ様々な趣向や生き方があり、多様性を認め合いながら社会を創るための資質・能力を育成していく必要があると捉えた。

そのような中、多田は「持続可能な社会とは、異質な他者との協力・共存によってこそ実現されていく。他者との間にある深い溝に気づきつつ、理解の不可能性を超えて、価値観の相克を包摂する姿勢・態度をもち、対立や異見をむしろ生かし、希望ある未来が共創できる資質・能力、技能を培っていく必要がある。」<sup>1</sup>と、持続可能な社会を創るためには、異質な他者と交流したり学び合ったりする中で資質・能力を育ていく必要性を述べている。石森は「自分とは異なる文化や価値観に出会った時、世界観や視野が広がる。(中略)他の文化や風習と出会うことにより、自国文化の素晴らしさをあらためて再認識する。」<sup>2</sup>と述べ、より多角的な学力を養成し、予測不可能な事態にも対処できる資質・能力を高めていく実践の必要性を示唆している。細川は「国家・民族間に限定した集団類型の特徴や傾向を学ぶことでは決してなく、むしろそうした集団類型を超えて、どのように人と人が理解しあえるか/しあえないか、を考える場を形成すること」<sup>3</sup>と、これから求められる教育の場を工夫していく必要性を述べている。さらに、松尾は「社会科教育の核心には、自分とは異なる人といかに生きて

<sup>1</sup> 佐藤学/木曾功/多田孝志/諏訪哲郎「持続可能性の教育—新たなビジョンへ—」2015年, 教育出版

<sup>2</sup> 石森広美『「生きる力」を育むグローバル教育の実践—生徒の心に響く主体的・対話的で深い学び—』2019年, 明石書店

<sup>3</sup> 西山教行/大木充「グローバル化のなかの異文化間教育—異文化間能力の考察と文脈化の試み—」2019年, 明石書店/細川英雄「第3章 日本社会と異文化間教育のあるべき姿」

いくのかという課題がある。」<sup>4</sup>と、他者とともに自分がどのように生きていく(ライフスタイル)のかまで考えさせることが、社会科教育の課題の一つであることを主張している。異質な他者と対話する経験をさせていくことや、人間の多様性を理解し合う中で自分の生き方(ライフスタイル)について考えを深めていくことが、社会科教育において求められていると捉えた。

また、本校では茨城大学との連携によって平成22年にESD(Education for Sustainable Development「持続可能な開発のための教育」)の研究を試験的に行った。筆者は、社会科という教科の特質上、とくに地理的分野において、ESDは単元を構想する上で重要な理念の一つと考え、大学との共同研究が終了した後も実践を進めてきた。持続可能性の教育は、知識の定着にとどまらず、どのような解決策や生活の方向性を創出していくべきかという、生徒の生き方について教師とともに考えていく教育である。本教育は、正解かどうか分からない解決策や生活の方向性について、ともに社会を創っていく他者と対話しながら、よりよい社会を創るという一つのゴールに向かって、自分事として学びを深めていくことが重要と考えている。具体的にどのような実践が有効なのだろうか。

以上より、今後、持続可能な社会を創っていく中心となるのは生徒であり、社会科教育の中で身に付けさせるべき資質・能力を明確にし、具体的に実践していきたいと考え、本研究主題を設定した。

## 2 研究のねらい

第1学年地理的分野「世界各地の人々の生活と環境」における対話と振り返りの仕方の工夫を通して、多様性が進む社会の中で生きるための資質・能力を育む社会科学習の効果を究明する。

## 3 研究の仮説

第1学年地理的分野「世界各地の人々の生活と環境」における対話と振り返りの仕方を工夫すれば、多様性が進む社会の中で生きるための資質・能力を育むことができるだろう。

## 4 研究の手立て

多様性が進む社会の中で生きるための資質・能力を育むために、第1学年地理的分野「世界各地の人々の生活と環境」における対話と振り返りの仕方を工夫する。

## 5 基本的な考え方

### (1) 「多様性が進む社会の中で生きるための資質・能力」とは

多様性が進む社会の中で、育むべき資質・能力について明らかにする。生活習慣、信条、宗教、文化などが異なる人々が交流し、一緒に暮らす社会となれば、相互のあつれき、摩擦、抗争なども多くなりがちである。そのような社会の進行にともない、村田は「異質な人々がいかに共存・共生していくか、そのために何が必要で、いかなる教育が求められているかを考察・究明していかなければならない。」<sup>5</sup>と教育において実践していくべき価値を提起している。

井田は、地理で目指す人間像の一つとして「知識だけでなく、それを活用して自分たちの住んでいる生活圏、国、世界といった地域に貢献できる人間」<sup>6</sup>をあげている。石川は「生涯を通して主体的に学び、他と協働しながら発信し続け、よりよい社会(郷土)を築いていこうとする民度の高い人材育成」<sup>7</sup>を述べ、教育内容を組織的に配列することを具現化の方策としてあげている。また、奈須は「個々の内容について子供の世界との緊密な関連付けを図り、現実世界で展開されている本物の社会的実践という文脈や状況の中で主体的・対話的に深く学ぶ」<sup>8</sup>ことを、これからの学びにおける重要性を示唆している。さらに、西村は「社会的自立を目指し社会を形成する力としての能力や意識(態度)を意図的に育成する一貫性教育は、学校・教師、家庭、地域の役割分担の明確化と相互交流の連携において

<sup>4</sup> 森茂岳雄, 川崎誠司, 桐谷正信, 青木香代子(編著)「社会科における多文化教育—多様性・社会主義・公正を学ぶ—」2019年, 明石書店/松尾知明「第2章 多文化教育で育成がめざされる資質・能力」

<sup>5</sup> 村田翼夫「多文化社会に応える地球市民教育—日本・北米・EUのケース—」2016年, ミネルヴァ書房

<sup>6</sup> 江口勇司, 井田仁康, 唐木清志他「21世紀に求められる『社会的な見方・考え方』」2018年, 帝国書院

<sup>7</sup> 新井郁男「教育展望4月号」2019年, 大日本印刷株式会社/石川淳「今日も笑顔で夢いっぱい!創造・発信・協働・挑戦!」

<sup>8</sup> 奈須正裕「『資質・能力』と学びのメカニズム」2017年, 東洋館出版社

達成が可能となる。」<sup>9</sup>とし、グローバル化による多文化化が進む中で求められる社会を形成する力の育成には、これまでのように各校種が個別に対応するのではなく、校種間の連携やつながりを大切にしながらカリキュラムを構想していく必要があると述べている。

これらのことから、生徒の身の回りの実社会である「地域」にスポットを当てることにした。その理由として、実際に生徒が身の回りにおいても多様性が進んでいると気付くことができるようにすること、地域で生活している他者と対話することで協働的に一つの社会を創っていく必要性や切実感をもたせるようにすること、自分の生き方(ライフスタイル)を考える上で他者の存在をイメージできるようにすること、中学校第1学年の生徒にとって地域学習が中心だった小学校社会科との接続を意識しながら学習に取り組むことができるようにすることなどがあげられる。

本単元を実施するにあたっては、実社会で生活している人と生徒とを出会わせながら学習を進めていくように単元を構想していく。生徒の身の回りの実社会で生活している他者の生の声を聴くことで、地域においても実際に多様性が進んでいることに生徒が気づき、それらの人々と一緒に構成する実社会において、自分がどのように生きていくべきなのか考えていけるようにするためである。

以上より、多様性が進む社会の中で生きるための資質・能力を「他者や自分の存在を大切にし、地域を中心とした社会に主体的な態度で参画・貢献<sup>10</sup>しながら、自分の生き方(ライフスタイル)について内省(自己探究・自己更新)していく力」と設定することにした。

## (2) 「対話」とは

佐藤は、多様な価値観を有する人と構成する持続可能な社会を創るためには、「新しい世界と出会い対話し、新しい他者と出会い対話し、新しい自己と出会い対話する。」<sup>11</sup>と述べ、多田は、グローバル時代の対話型授業について「自己内対話と他者・対象との対話の往還により、差異を尊重し、思考を深め、視野を広げ、新しい智慧や価値、解決策を創り上げていき、その過程を通して、参加者相互が共創的な関係を構築していく協働・探求的な学習活動」<sup>12</sup>と述べている。杉原は「人が人と関わり合い協働していく活動では、相互に影響を及ぼし合ったり、場面に応じた役割を担ったりするため、ひとりでは得られない深い気づきや多面的視点を得ることができる。」<sup>13</sup>としている。これらより、対話の対象は、さまざまな他者や事象、自分であり、対話を通して思考を深め、互いにとってよりよい関係を築いていくことが重要であると考えた。協働的に学び合う中で対話する場面を適宜設け、社会的な見方・考え方を広げたり、深く学んだりできるようにしていく。

本校では、「対話」について「話題に対して生産的な結論を出すことを前提に話し合ったり、対話者同士の考えにとって互恵的な影響が生じたりするように行う話し合い活動」<sup>14</sup>と定義している。対話の対象については明示してはいないが、他者、事象、自分の三つであることは、佐藤らと同様である。そこで、本研究において「対話」の具現化を図るために、下の4点を工夫することにした。

- ① 根拠を明確にしながら話したり聴いたりできるようにするために、ペア、グループ、全体など、活動のねらいに応じて形態を変えながら、単元を通して対話のトレーニングをする場を工夫して設定する。
- ② 受容的な雰囲気をつくるために、はじめて出会った地域の人と対話(本単元ではインタビュー)する際、座席の配置を工夫する。
- ③ 対話をしながら新たな問いを見いだしたり、内化(話し合ったことや調べたことから考えること)や外化(考えたことを発信すること)しながら対話を深めたりしていけるように、できるだけメモを取らず対話に集中し、最後に印象に残っていることを中心に記録するよう、時間の使い方を明確にする。
- ④ 今後の自分の生き方(ライフスタイル)について自分と対話するために、授業や単元の後に、自分と対話する時間を設定する。

<sup>9</sup> 唐木清志、西村公孝、藤原孝章「社会参画と社会科教育の創造」2010年、学文社

<sup>10</sup> 本校では「参画・貢献」を「空間を互恵的でよりよいものにするために考えを述べたり、行動したりしていくこと」と定義付けている。

<sup>11</sup> 佐藤学/木曾功/多田孝志/諏訪哲郎「持続可能性の教育—新たなビジョンへ—」2015年、教育出版

<sup>12</sup> 多田孝志「対話型授業の理論と実践—深い思考を生起させる12の要件—」2018年、教育出版

<sup>13</sup> 杉原麻美「多文化共生社会における協働学習」2018年、学文社

<sup>14</sup> 茨城大学教育学部附属中学校「公開授業研究会紀要」2018年

### (3) 「振り返り」とは

佐藤は「自分の学びをセルフ・コントロール（自己調節）し、多様な人的・物的資源とダイアログ（建設的な話し合い）しながら、オーセンティック（本物）な学びを繰り返すことができる機会をいかに設定できるのか」<sup>15</sup>と、活動的で反省的な学習スタイルを繰り返す中で自分の学びを調節していくことの重要性を述べている。安彦は、振り返りについて主体的・対話的で深い学びと関連付けながら、『自分(たち)にとって』の『意味』や『価値』というものに結びつけて、『学びがい』を感じるものにし、最終的には自力で『生きがい』につなげることである。<sup>16</sup>と述べ、生徒自身が自分にとって学ぶ意義を実感しながら学習を進め、自分の生き方(ライフスタイル)につなげていけるようになることが大切であると述べている。同様に、市川も「学習というのは、自分の将来の生き方につながるものであるという意義づけをもたせる」<sup>17</sup>とし、学びを整理するだけではなく、発展させていくことの重要性を述べている。

「振り返り」には、多様な意味が混在し、イメージが混乱するおそれがある。そのため、本研究においては、上記の考え方から、「振り返り」を二つの目的を達成させるために実践するものと設定する。一つには、学びを整理することである。生徒が学びの過程を通して、その意味や価値を獲得したり、自分の概念の形成過程を振り返ったりするために「振り返り」を行う。もう一つは、自己調整を図り、今後の自分の学びに向かう態度や生き方(ライフスタイル)について考えることである。田中がメタ認知について「自分で自分の人となりや学習の状況を評価し、それによって得た情報によって自分を確認し、今後の学習や行動を調整すること」<sup>18</sup>と述べているように、学びの発展としての「振り返り」である。

本研究は、本校の研究に沿って進めたものである。本校の研究における、手立てⅢ「内省(自己探究・自己更新)」は、学びの発展としての「振り返り」を重視しているが、毎時間の学びをきちんと整理する過程を経てこそ成し遂げられるものである。そこで、本研究においては「振り返り」の具現化を図るために単元シート(次頁、図1)を活用し、下の3点を記述できるように工夫した。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 自分の見方・考え方の変容を視覚化するために、単元の学習前後の見方・考え方を比較できるようにする欄を設ける。</li><li>② 単元全体を通して単元課題の解決に向けた学びを展開していけるようにするために、毎時間の振り返りを残す欄を設ける。</li><li>③ 今後の自分の生き方(ライフスタイル)について自分と対話するために、授業や単元の後に、自分と対話したことを表現する欄を設ける。</li></ol> |
|--|

単元シートは、本校の社会科研究部で開発し、活用しているものである。下の4点について記述できるようになっている。本研究においては、単元全体を通して単元シートの活用を図っていく。そして、単元前後の自分の見方・考え方の変容を教師はもちろん生徒も評価したり、単元課題に対する自分の考えを積み上げたりできるようにする。

#### 〈単元シート〉

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>○ 単元名に対する、単元前後の自分の考え</li><li>○ 単元課題に対する、単元前後の自分の考え</li><li>○ 単元と自分との関わりに対する、単元前後の自分の考え</li><li>○ 単元課題の課題解決に向けた、毎時間の学びの後の自分の考え</li></ul> |
|---|

<sup>15</sup> 新井郁男「教育展望—学びの一貫や系統を大切に学校の間(異校種間)連携—」2019年,大日本印刷/佐藤真「高大間のカリキュラムギャップの解消と質の高い大学教育の実質化」

<sup>16</sup> 新井郁男「教育展望—改めて問う、深い学びとは—」2018年,大日本印刷/安彦忠彦「これからの教育が目ざす深い学びとは」

<sup>17</sup> 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会「カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向け—」2015年,東京大学出版会/市川伸一「第1部第3章 社会に生きる学力」

<sup>18</sup> 田中耕次・鶴田清司他「新しい時代の教育方法」2012年,有斐閣アルマ

【社会科】「世界各地の人々の生活と環境」

学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

**学習前**（「世界各地の人々の生活と環境」について）  
 環境によって変わって工夫される生活は、伝統などから日本に伝わってきたものもあるのではないかと感じました。生活が工夫されている国同士の共通点や相違点を探してみたいと思います。

**学習後**（「世界各地の人々の生活と環境」について）  
 予想のように環境によって生活が工夫されていることが詳しくわかりました。環境によって暮らし方が食べ物、衣服が変り、てくさることを実感した暮らしがくりかえされていると気づきました。このことは国同士の共通点であり、相違点として分かっていくことがわかりました。

**単元課題** 世界各地の人々の生活は環境とどのように結び付いているのか。

**学習前** 単元課題に対する考え  
 小学校の学習を振り返ることで環境による閉鎖の違い、好きな食べ物の違いなども思い出しました。その国の人が考えた工夫は地域の特色が見えると思うので工夫から特色を調べられるのではないかと。

**学習後** 単元課題に対する考え  
 各地の生活の習性から地域の特色が、より分かるようになりました。昨日より少ししかを履いてはいけなかったり熱いのでTシャツは着ていなかったりと特色による暮らしの違いの良さをこの単元で知ることができました。

1日目の学習のタイトルをつけましょう。 5月15日(木)  
**寒帯地方の食文化**  
 本日の学びで、内容または見方・考え方について大切に思うことを書きましょう。  
 寒帯地方の伝統的な暮らしから現代の暮らしを知り、変化している部分がありました。寒い地域から分かります。環境を生き取り、調がた。そこから現地の人が工夫を凝らす姿が伝わりました。

2日目の学習のタイトルをつけましょう。 5月17日(金)  
**熱帯の暮らしと環境**  
 本日の学びで、内容または見方・考え方について大切に思うことを書きましょう。  
 熱帯の生活も学習することができました。衛生と暑さを上手に乗り越える工夫が環境から学ばれていました。暑帯と比べて冬は暑帯が環境から学ばれてきたことには驚いていました。

3日目の学習のタイトルをつけましょう。 5月21日(水)  
**乾燥帯の環境から生まれる生活**  
 本日の学びで、内容または見方・考え方について大切に思うことを書きましょう。  
 乾燥帯の人々の工夫を学ぶことができて良かったです。乾燥帯の環境から学ぶことができて良かったです。乾燥帯の環境から学ぶことができて良かったです。

4日目の学習のタイトルをつけましょう。 5月24日(土)  
**冷帯に住む人々の生活**  
 本日の学びで、内容または見方・考え方について大切に思うことを書きましょう。  
 高山・極寒の冷帯に住む人々の生活を学びました。高山・極寒の冷帯に住む人々の生活を学びました。高山・極寒の冷帯に住む人々の生活を学びました。

5日目の学習のタイトルをつけましょう。 月 日 ( )

6日目の学習のタイトルをつけましょう。 月 日 ( )

7日目の学習のタイトルをつけましょう。 月 日 ( )

8日目の学習のタイトルをつけましょう。 月 日 ( )

9日目の学習のタイトルをつけましょう。 月 日 ( )

**学習前**（「世界各地の人々の生活と環境」と自分との関わりについて）  
 熱帯の地域の人と同じような暮らしのイメージを想像したり、マスコットを調べたり、その土地に親近感を覚えることにより異文化に親しみやすくなると思います。そんな地域の特色を今日の学習で調べることができそうです。

**学習後**（「世界各地の人々の生活と環境」と自分との関わりについて）  
 環境の違いから生活の工夫や食べ物や衣服の工夫など、違う地域の人々に注目したり地域による違いを学ぶことが大切だと感じました。そして、生活の工夫や食べ物や衣服の工夫など、違う地域の人々に注目したり地域による違いを学ぶことが大切だと感じました。

図1 単元シート

6 研究の内容

2019年5月に、第1学年一クラス(男子18名、女子18名、計36名)を研究対象とし、検証を行った。

(1) 実践

- ① 単元名 世界各地の人々の生活と環境
- ② 単元について
  - ア 単元観

本単元は、中学校学習指導要領〔地理的分野〕大項目「B 世界の様々な地域」における「(1) 世界各地の人々の生活と環境」を受けて設定している。本単元では、場所や人間と自然環境との相互依存関係などに関わる視点に着目して、世界各地の人々の生活が営まれる場所の自然的条件と社会的条件を関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する力を育成することを主なねらいとしている。学習の全体を通して、世界各地の人々の生活や環境の多様性、それらの相互依存関係を理解できるようにすることが求められている。

イ 生徒の実態

本単元に関わる意識調査(2019.5.17実施/第1学年A組:男子18名、女子18名 計36名)を行ったところ、宗教に対する回答結果で気になる部分があった。「自分の家で信仰している宗教について知っているか」という質問について、信仰している宗教名を記述できた生徒は13.9%であった。また、「宗教は何のためにあるのか」という質問については、「分からない」と回答した生徒が50.0%であった。これらからは、生徒にとって宗教と生活は、あまり関連付いていない(結び付いているという認識が低い)ことが分かる。これは、現代の我が国の生活文化における傾向を象徴しているのかもしれない。

また、三大宗教についてそれぞれ知っていることを自由記述(複数回答可)させたところ、多かった順に「イエス」(21名)、「仏」(10名)、「シャカ」(6名)、「クリスマス」「断食」「メッカ」(5名)などであった。生徒は各宗教における開祖やニュースなどで取り上げられる話題について

は聞いたことがあるが、慣習などについてはほとんど知識がないことが分かった。国際化が進展する現代社会において、様々な宗教における日常的な慣習に着目して背後にある価値観を理解させたり、様々な宗教を尊重したりする態度を育てていく必要があると捉えた。

## ウ 指導観

生徒は、小学校社会科の学習において、地域学習や我が国中心の学習を行ってきた。中学校のスタートで行う地理的分野における本単元の学習は、空間的に離れたところの内容でもあり、工夫をしなければ知識的な理解で留まってしまうという課題を感じている。小学校第6学年では、「イ(ア)外国の人々の生活の様子」において、我が国と関連の深い国々を取り上げて学ぶことになっている。本単元を進めるにあたっては、世界各地の人々の生活に影響を与える自然的条件や社会的条件に着目し、世界各地の人々の生活は、環境に適応したり、環境を変えたりしながら営まれていることについて考えさせていく。また、宗教については身近な地域に多様な宗教が存在していることに気付かせ、それらの宗教を信仰する多様な人々と社会を構成するようになってきたことを取り上げることで、生徒が本単元を学ぶ意義を実感しながら進めていくことができるようにしていく。

本単元は、まず、自然的条件や社会的条件による環境の違いや変化と人々の生活に視点を置いて進めていく。時間の経過や空間的な位置の違いによってなど、様々な条件や要因によって現在の生活が営まれていることについて、地理的な見方・考え方を働かせながら多面的・多角的に思考・判断・表現していけるようにする。次に、宗教の違いによる人々の生活に視点を置いて進めていく。宗教は、人々が多様な生活環境を受け入れながら、よりよく生きたり幸せになることを願ったりするために生まれたものである。世界各地の地理的条件の下で発生し、発展してきたことを理解させていきたい。

近年、日本は観光や就労を目的とした外国人の数が増加し、多様な人々とともに社会を創っていく時代となってきた。茨城県における在留外国人数は63,976人(2018年6月末)であり、全国10位となっている。本校が位置する水戸市には3,485人の在留外国人が生活し、県内では5番目に多くなっている。大学が近いこともあり、外国人を見かけたり、商業施設の店員として働いている外国人と接したりすることは日常化してきた。そのような社会において、生活と結び付く様々な宗教の表面的な差異に固執するのではなく、様々な宗教が成立し発展してきた背景を尊重しながら、宗教相互の共通性を見だし、違いを受容する態度を形成していくことが重要である。

そこで、世界各地の多様な環境や宗教による生活や慣習などの違いを理解し、互いを受容する態度を形成していくため、身近な地域で生活している外国籍の方々(キリスト教、イスラム教、仏教など)を中心に授業に招き、交流する場を設定することにした。慣習などに関わる話を実際に信仰されている方から聞いたりインタビューしたりすることで、世界各地の人々の生活や宗教に対する理解を深められるようにする。また、身近な地域をともに創っている他者と交流する場を本単元に導入することで、まとめにおいて自分と学びを関連付けて深く考えたり、次單元である「世界の諸地域」の学習につなげたりしていけるように工夫していく。

## ③ 単元目標

- 人々の生活は、その生活が営まれる場所の自然的条件や社会的条件、信仰する宗教などによって影響を受けたり、その場所の自然的条件や社会的条件に影響を与えたりすることを資料の読み取りや話し合いなどを通して、理解することができる。(知識・技能)
- 世界各地における人々の生活の特色やその変容の理由を、その生活が営まれる場所の自然的条件や社会的条件などに着目して多面的・多角的に考察し、表現することができる。(思考・判断・表現)
- 世界各地の多様な人々の生活の営みについて粘り強く学んだり、異なる文化や宗教の存在を尊重したりする態度を身に付けようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

## ④ 研究テーマにせまる手立て

### I 一人一人の自立を促す学び

カリキュラム・デザインを明確にすることで他教科や小学校社会科との関連をふまえ、教科横

断的な学びを実現するとともに、異校種との接続を視覚化・明瞭化し、発展的で質の高い学びを展開していけるようにする。具体的には、国語科(第1学年)「A 話すこと・聞くこと」「話すこと ウ」「聞くこと エ」や特別の教科 道徳「C18 国際理解, 国際貢献」、総合的な学習の時間において育むべき資質・能力として掲げられている(1)(3)などである。また、小学校社会科においては、学習内容との関連から主に第6学年における「イ(ア)外国の人々の生活の様子」における学びを発展させていけるように構想していく。

国語科において身に付けた話し方や聞き方が、協働的に学び合う際の対話や学校外の人的資源を活用する際のインタビューに有効に働くはずである。総合的な学習の時間においては適切に情報を収集し、多様なテキスト情報から必要な情報を選択することは頻繁に行われる。小学校の学習を重複することなく、より発展させていくことは中学校における使命と言ってもいい。教科横断的に育むべき資質・能力を働かせながら学びを展開していく中で、相互作用的に資質・能力が豊かになっていくようにデザインしていく。また、単元シートを活用し、生徒が毎時間につながりを実感していけるようにするとともに、単元課題に対して多面的・多角的に考察していけるようにする。そのために、世界で営まれている人々の生活を比較・関連させたり、気候の違いが生じる要因となる気候因子に着目して学習計画における配列を工夫したりしていく。

## II 社会への参画・貢献を促す学び

単元を通して、一人一人が主体的に思考・判断・表現したことをもとに協働的に学び合い、適切で適正な行為や態度に向かっていく資質・能力の育成を目指す。そのために、課題解決的な学習課題を設定し、スモールセル構成を中心としながら学び合い、インタビューやシェアリングなどを行っていく。その際、地理的な見方・考え方を働かせながら解決していく課題を設定したり、

他者の視点を授業に取り入れたりしながら学びを深めていく。ペア、グループ、全体など、形態は活動のねらいに応じて変えていくが、内化(話し合ったことや調べたことから考えること)や外化(考えたことを発信すること)しながら考えを再構築していく対話をサイクリックに展開していく。そのような中で、小学校第6学年「イ(ア)外国の人々の生活の様子」における社会的な見方・考え方から、地理的分野における見方・考え方を働かせながら、生徒が学びを深めていけるようにする(図2)。

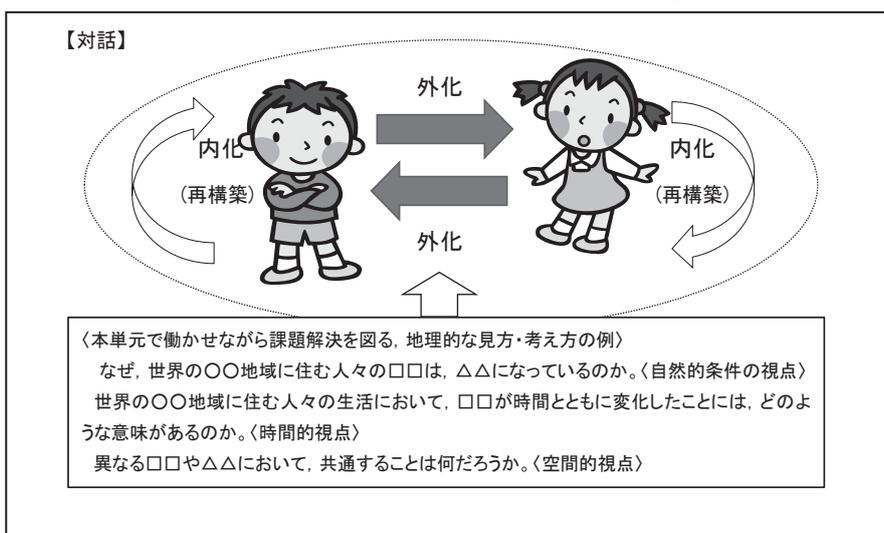


図2 本単元における対話のイメージ

単元の後半には、学校内外の人的資源の活用を図り、身近な地域で生活する外国籍の方々(キリスト教, イスラム教, 仏教など)にインタビューする場を設定する。本校の附中スクールボランティア制度を利用し、生涯学習センターや国際交流センターを通じてご協力をいただけるよう要請した。学習のねらいを地域社会に開き、生徒の学びを支援してもらおう。韓国, インドネシア, 台湾などアジア州出身の方々やカナダ, ポーランド出身の方々との交流を計画している。生徒が、身近な地域社会で生活する多様な他者(世界各地の様々な環境のもとで生活されてきたの方々)とつながる場を創出し、実際の声を聞くことで、世界各地の人々の生き方(ライフスタイル)や日常的な慣習が実感をともなった学びとして生徒に深まっていくことを期待していく。また、本単元は第1学年「世界の諸地域」の学習前に位置付いており、各州について具体的に学習を進めていく前段階として、多様な人々の姿に実際に触れておくことは有効に作用するのではないかと考える。

### Ⅲ 内省(自己探究・自己更新)を促す学び

内省(自己探究・自己更新)は、他教科等における多様な学びとともに緩やかに自然につながり具現化されていくと考える。よって、国語科や特別の教科 道徳、総合的な学習の時間などにおける学びを通して、資質・能力の側面から本単元における学びと関連して内省(自己探究・自己更新)は促されていくことが期待される。

本単元では、とくに第2次の第9時に行う単元シートへのまとめの考察を通して、単元全体における学びと自分との関わりについて意義を見いだせるように支援していきたい。生徒自身の中では、それまでの様々な環境のもとで生活している人々の営みを学んでいる中でも、自分たちの生活と比較して考えていくことが期待できるし、特別な思いや考えについては毎時間の振り返りに残していくように指導していく。第9時においては、単元前の自分と単元後の自分とを比較して、できるようになったことや不足していると感じたこと、単元課題に対する考えの変容や深まりなどについて、学習への自己調整を図るための視点を示しながら生徒自身が客観的に評価していけるようにする。

また、本単元における学びと自分の生き方(ライフスタイル)についても関連付けて内省(自己探究・自己更新)していけるように促していく。生徒は、今自分ができることや、今後もっと深く考えたり実際に実践したりしていきたくていくことが予想される。丁寧に毎時間(単元全体)の振り返りを繰り返し行うことを通して、生徒が自分の変化・成長・発達を確認し、自己肯定感の向上につながっていくように支援する。さらに、単元における学びの様子については、定期的に保護者にも学習状況を伝え、家庭と連携を図りながら生徒の学びを今後も支援していけるよう努めていく。

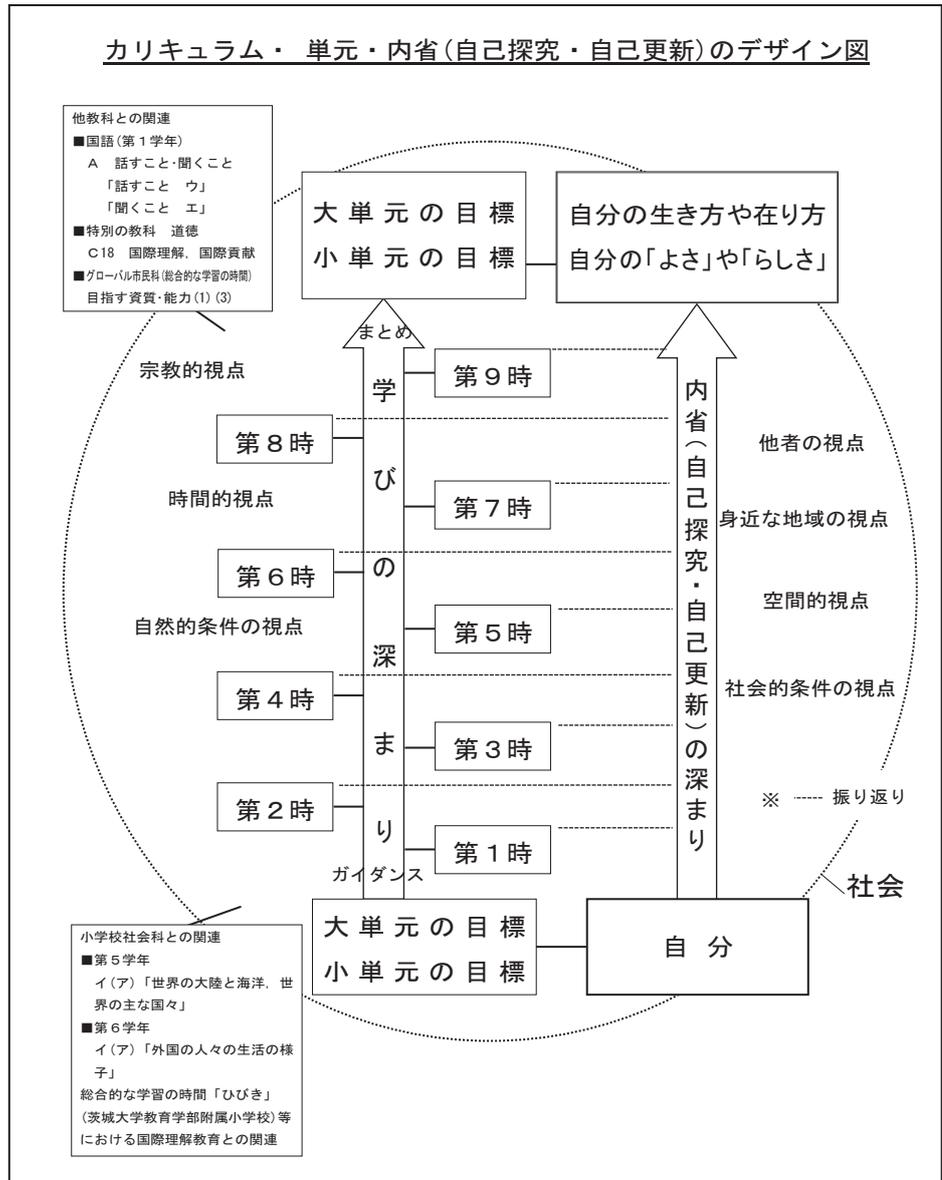


図3 本単元の学習構想図

⑤ 指導と評価計画（9時間扱い）

時間		学習内容・活動	評価計画				
次	時		知 技	思 判 表	主 体 的	評価基準【評価方法】 ○指導上の留意点	◎規準を満たす ための手立て
第 1 次	1	【単元課題】 世界各地の人々の生活は、環境とどのように結び付いているのか。  雪と氷の中で暮らす人々	○		○	評 人々の生活の舞台を調べるために、雨温図の読み取り方を身に付け、寒帯の特色を意欲的にまとめることができる。 【発表・ワークシート】	◎ 身近な地域の雨温図と比較しながら読み取ることで、気候の特色を捉えられるようにする。
	2	常夏の島で暮らす人々		○		評 熱帯の気候で暮らす人々の生活の様子について考察し、農産物や食生活などと関連付けてまとめたり、表現したりすることができる。 【発表・ワークシート】	◎ 輸入されてくる熱帯特有の農産物を取り上げることで、身近な生活との結び付きについても考えられるようにする。
	3	乾燥した土地に暮らす人々		○	○	評 乾燥地域で暮らす人々の生活や文化が生まれた背景と変化の過程について、自然的条件や社会的条件を踏まえて粘り強く考察し、説明することができる。【発表・ワークシート】	◎ 自然的環境や社会的環境などの視点を含めて整理することで、環境と人々の生活の結び付きを説明できるようにする。
	4	温暖な土地に暮らす人々		○		評 温帯の気候で生活している人々の暮らしを、自分たちの生活と比較しながらその特色を考察し、説明することができる。【ワークシート】	◎ 写真や雨温図の読み取りを通して同じ温帯でも違いがあると気付くことで、説明できるようにする。
	5	寒暖の差が激しい土地に暮らす人々		○		評 シベリアに住む人々の生活の様子を理解し、それらの特色を自然環境と関連付けて説明することができる。【ワークシート】	◎ 環境と生活との結び付きに視点を当てることで、気候の特色を捉えられるようにする。
	6	標高の高い土地に暮らす人々	○			評 高地における農牧業を、これまでの学習と関連付けて理解することができる。【ワークシート】	◎ 図を用いることで、自然環境に適応した生活を理解できるようにする。
	7	人々の生活に根づく宗教①	○			評 世界的に広がる主な宗教の分布の広がりや生活との関わりを理解することができる。【ワークシート】	◎ 主題図などの資料から、宗教の広がりや慣習などを理解できるようにする。
8	本時	1 学習課題と本時のねらいを確認する。 2 本時の流れを確認し、交流を行う。 (1) 深く知りたい宗教を選び、場をつくる。 (2) 交流する。 ① 慣習などについて話を聞く。(3～5分) ② 質問したり、一緒に考えたりする。(15分) ※ もう一つ宗教を選び、繰り返す。 3 交流を通して、考えたことや分かったことをまとめる。 ・宗教は表面上の慣習には違いがあるが、どの宗教も様々な環境のもとで人々が幸せになることを願って発展してきたことは同じである。 4 振り返りを行い、次時の見通しをもつ。		○	○	○ 地域で生活されている外国人の方々をスクールボランティア(以下「SV」と略記)として活用することで、身近な社会にも多様な人々の生活が営まれていることを確認できるようにする。 ○ 交流する時間を確保し、世界各地の人々の生活について、理解を深めていけるようにする。 評 宗教は慣習には違いがあるが、どの宗教も人々が幸せになることを願って発展してきたことを考えることができる。【ワークシート・発言】 ◎ SVの方へのインタビューを通して、共通する部分を想起しながら考えていくことで、単元課題に対する自分の考えを深めていくことができるようにする。	
第 2 次	9	考察・まとめ	○		○	評 単元課題に対する考察を行い、次の単元への見通しをもつことができる。【単元シート】	◎ 単元全体を通して感じたことや考えたことを省察していくことで、自分の成長や次の学びにつなげていけるようにする。



図4 授業の様子

### ⑥ 実践の概要

第1学年地理的分野「世界各地の人々の生活と環境」において、多様が進む社会の中で生きるための資質・能力を育むために、対話や振り返りの仕方を工夫して実践した。

対話については、単元全体を通して個人、ペア、4人組、全体と目的に合わせて形態を変えながら実践した。単元の最後に、本研究の中核であった地域で生活されている外国籍の方々との交流会を実施した。キリスト教、イスラム教、仏教を信仰されている方々にSVとして授業に参加していただき、慣習や背景・理由について説明していただいたり、生徒が質問したりしていった。

受容的な雰囲気づくりに向け、SVとの距離を狭める工夫をした。宗教によるさまざまな慣習の違いがあること、そのような慣習に沿って生活している方々が地域で共に生活していることに気付くとともに、多様が進む社会を実感し、その中で自分たちが多様な人々と共に社会を創っていく必要があることについて気付かせていく授業を行った。

また、振り返りについては、単元全体を通して活用した。単元課題に対する自分の考えを記述させ、単元後に単元全体を通したまとめや自分との関わりについて記述させた。本単元は、はじめに環境(気候)の違いによる人々の生活の共通点・相違点を取り扱った後、宗教や文化の違いによる人々の生活の共通点・相違点を取り扱い、地域で生活されている外国籍の方々と対話する時間を設定した。宗教の違いによって慣習が異なることや本質的にはどの宗教も人間の幸せを願っていて同じであることへの理解を促し、多様な他者とともに生活していく上で必要なことについて考えさせた。

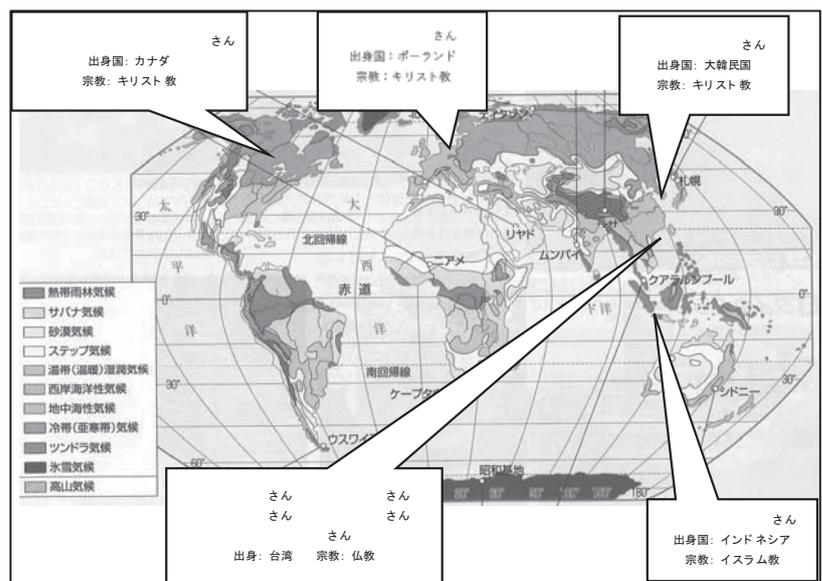


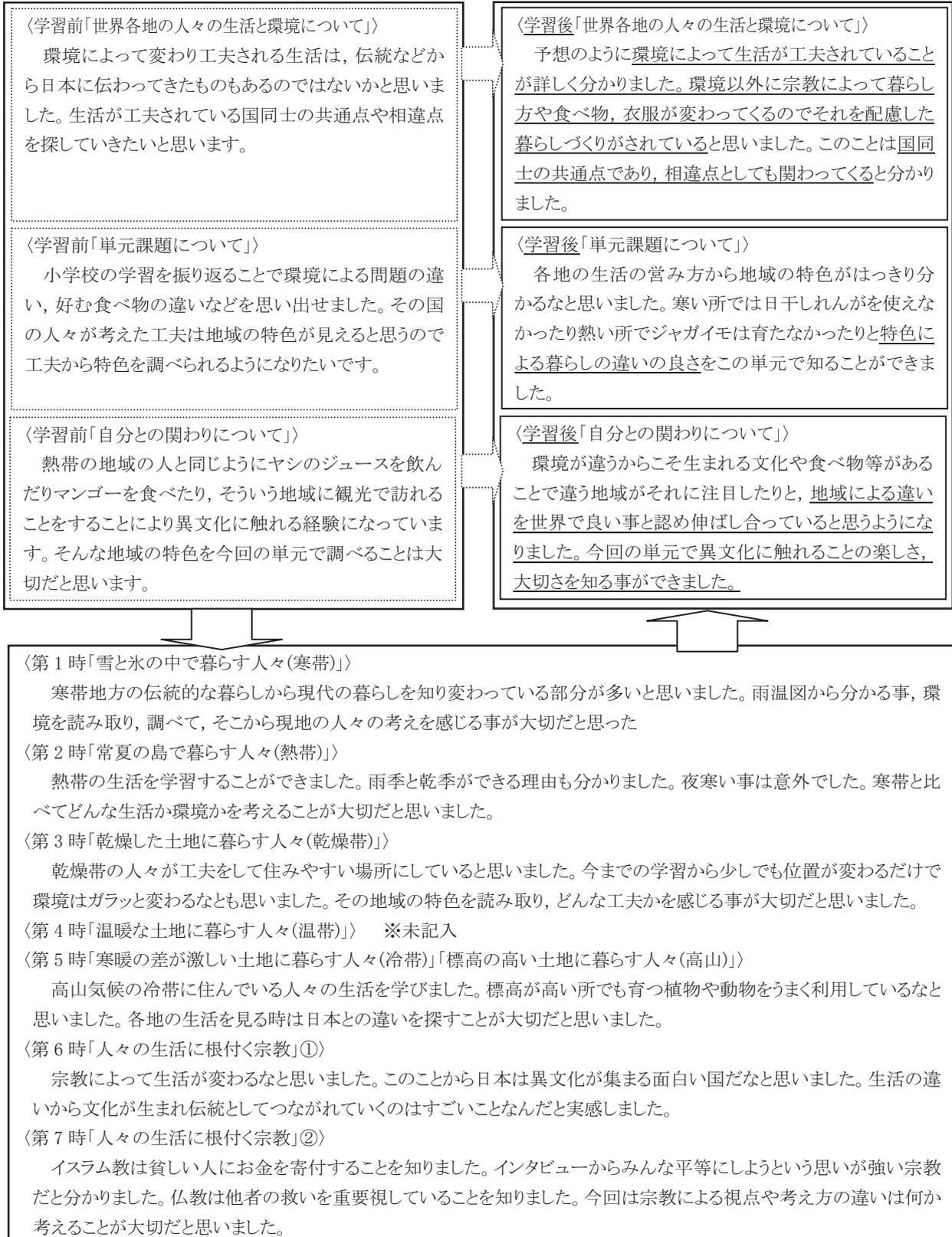
図5 配付資料

## 7 研究の結果と考察

### (1) 抽出生徒による考察

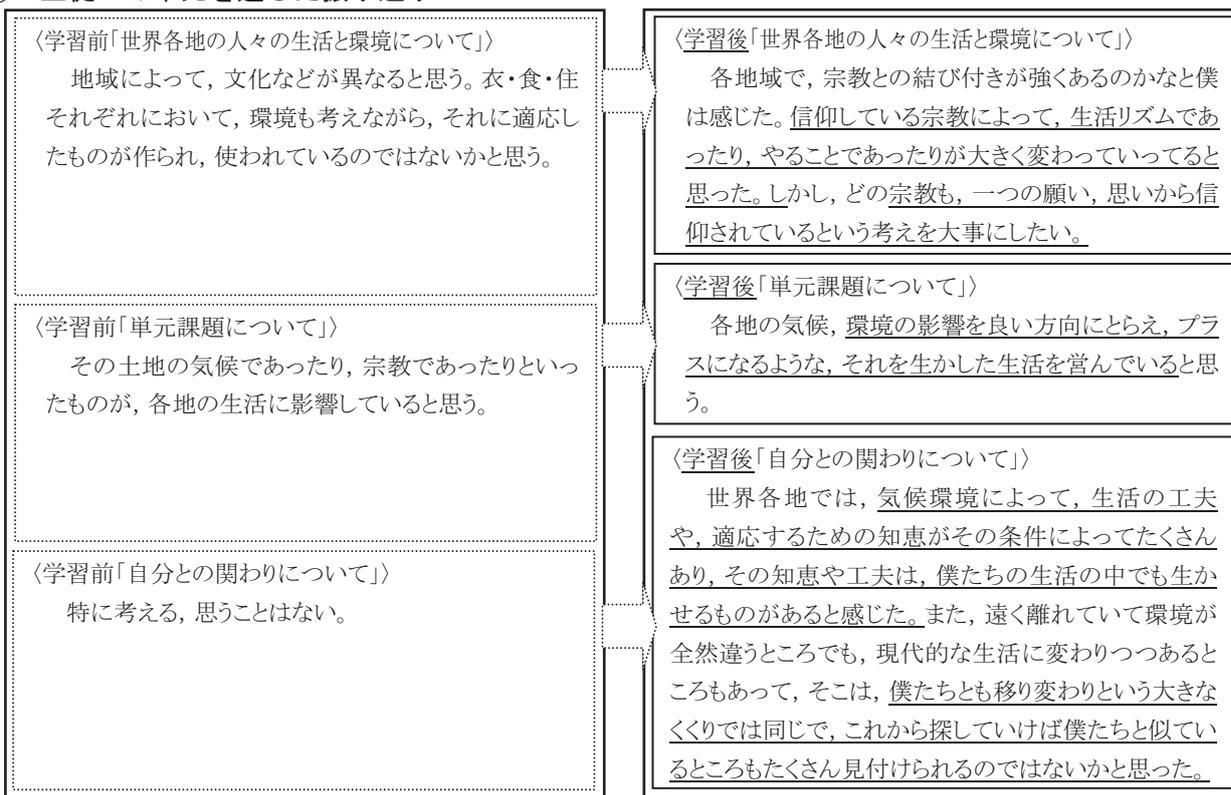
単元シートにおける振り返りをもとに、生徒の思考の変容をもとに検証していく。

#### ① 生徒 A の単元を通した振り返り



生徒 A は、単元課題「世界各地の人々の生活は、環境とどのように結び付いているのか」について自然条件や社会条件、宗教などと人々の生活が密接に結び付いていることを理解し、単元を通した学びを整理している。環境の違いから人々の生活の多様性が生まれており、その多様性を尊重しながら楽しんで向き合っていきたいと、自分の生き方(ライフスタイル)について記述している。

## ② 生徒 B の単元を通した振り返り



〈第 1 時「雪と氷の中で暮らす人々(寒帯)」〉  
日本から離れていても、同じ人で、全く違う環境で全く違う暮らし方をしている、動物や環境、自然を生かした生活をし、伝統の暮らし方をしているのは、今の日本にも生かせるところがあるのではないかと思った。

〈第 2 時「常夏の島で暮らす人々(熱帯)」〉  
昨日の寒帯の暮らしでは、現代の暮らしにスイッチしてきているという話があったが、熱帯では、昔からの生活方法が今も多く残っていたのだなと感じた。

〈第 3 時「乾燥した土地に暮らす人々(乾燥帯)」〉  
水がとても少ない状態で、生きるための知恵を出して、生きているその知恵は、水がある私たちの生活にも生かせるのではないかと思った。

〈第 4 時「温暖な土地に暮らす人々(温帯)」〉  
暖かく、暮らしやすい地域だと感じた。作物、農産物も育ちやすく、豊かな生活が営まれていると思った。東京と似た気候も多く、そこで使われている工夫を東京でも使える物があるのではと思った。

〈第 5 時「寒暖の差が激しい土地に暮らす人々(冷帯)」〈標高の高い土地に暮らす人々(高山)」〉  
冷帯では、年較差が非常に大きく、それに応じた生活(服装や住居など)が営まれているなど感じた。その工夫がそこに住んでいる人でないと思いつかないようなものもあって驚いた。高山気候の地域では逆にその高さを生かした生活を営んでいると感じた。

〈第 6 時「人々の生活に根付く宗教」①〉  
宗教の種類によって、生活とのかかわり方が全然違うなど調べていて思った。表面的なことは全然違見えるが、もとは、同じ理由で、宗教というものが成り立っており、一つの願いからできているということを大切な考えとして理解したい。

〈第 7 時「人々の生活に根付く宗教」②〉 ※未記入

生徒 B は、世界各地の人々が環境による違いを良い方向に生かして生活したり、宗教は慣習が異なっても(幸福になりたいという)一つの願いや思いから信仰したりしていることを理解し、単元を通した学びとして整理している。また、単元と自分との関わりについて、単元前は「特に考える、思うことはない」としていたが、単元後は「知恵や工夫は、自分たちの生活の中でも生かせるものがある」「自分たちと似ているところが見付けられる」としている。これは、自分と異質な他者の存在を尊重し、より良い関係性を見いだしながら自分たちの生き方(ライフスタイル)にも良い影響を及ぼすことができるようにしたいという意志の表れであると捉えた。

## (2) 地域で生活している外国籍の方との交流会に関わる振り返り

単元末に「世界各地の人々の生活と環境と自分との関わり」について振り返りを行った。地域で生活している外国籍の方との交流会に関わる記述を取り上げ、検証する。

- 〈生徒 C〉 スクボラの人にお話を頂いて、日本は宗教に外国から比べてあまりこだわらないことが分かった。他の国との交流のために宗教も大切にしていきたいな、と思った。
- 〈生徒 D〉 宗教についてインタビューをして、特に、イスラム教徒さんのお話を通して、宗教をやる意味について、とても理解できた。一番感動したのは、断食で、「まずしい人々の気持ちを知るため」という理由だということを知り、そのやさしさのようなものにとっても感動した。この感動をたくさんの人に伝えて、せめてでも宗教のすばらしさについて知ってもらいたいと思った。
- 〈生徒 E〉 自分達の周りにも、たくさんの宗教・地域からやってきた人がいて、その人たちと共存していかないといけないと思った。
- 〈生徒 F〉 いろんな気候や宗教を学習したけれど、自分達と深いかかわりがあるなと思いました。例えば、輸出・輸入の関係です。色々日本としていると思いました。自分達の暮らしに欠かせない物が身近にあると考えました。宗教も、SVの方が、どのようになっているのかなど生まれた国の話などをしっかりと教えてくれました。宗教も日本との関わり（神社）などもあり、神社もよく行くので自分達との関わりが強いということがわかりました。
- 〈生徒 G〉 自分に関わってくると思うのは、やはり宗教だと思う。でも、学習前とは大きく考え方が変わった。最初は、イスラム教と聞くと少し悪いイメージを持ってしまっていた。争いをしたりしている人がいるからだ。でも今回の学習で、イスラム教の人に話を聞いて、「断食をするのは貧しい生活をしている人々の気持ちを自分達も感じるためだ」と言っていたのを知り、イスラム教の人はなんてやさしいのだろうと感じた。争いをしたりしているのは一部の人のみで、それによってマイナスなイメージを持ってはいけない。宗教の良いところをたくさん見付けていきたい。～教だからと言って、差別をしてはいけないと思う。みんなの幸せをねがっていることは同じだから。
- 〈生徒 H〉 とても遠いところでも仏教でつながっていたり、日本が外国を助けたりすることなど、人々は常に関わり合い、つながっていると思う。
- 〈生徒 I〉 色々な宗教について調べたりお話を聞いたりして宗教によって色々なことのやり方が違ったりするから、自分と比較してこういうところは良いとか悪いとかが分かりました。お話を聞いたときにキリスト教は週に一回みんなで集まると言っていて、自分だったらめんどくさいなと思うけど、そんな時間が楽しいと言っていてとてもすごいなと思いました。なので私もそんな1つ1つの時間を大切にしていきたいなと思いました。
- 〈生徒 J〉 日本は、外国人観光客が多いと聞いたので、様々な気候や宗教の人に平等に接していくことが大切だと思った。
- 〈生徒 K〉 今、日本は平和でとても住みやすい国で差別や偏見はないけれど、世界ではそんな事がたくさん起こっていると思います。そういうのも生活環境が悪くなってしまう原因だと思うので、日本に来ている外国人の人にそういう思いをさせないように、うまくコミュニケーションをとってあげれば良いなと思いました。
- 〈生徒 L〉 自分が住んでいる日本でも、環境に合わせた暮らしがあることを初めて知りました。世界中で資源が少なくなっている中で、あるものを無駄なく活用することは、これからの未来のために大切なことだと思いました。
- 〈生徒 M〉 人々の生活は、宗教や環境と関わりがありました。そのため、日本とまったく同じ生活をしている所は無いと思います。でも、同じ四季がある国々とは似ていました。これからは、厳しい環境の中で生活している人々のことも考えて生活していくことが大切だと思います。
- 〈生徒 N〉 同じ国でも宗教などの考えが違う人がいるので、うまくそのような人も気遣って生活したい。

- 〈生徒 O〉 様々な外国の人（様々な宗教を信じている人々）が日本に来る。→茨城にもともに理解して、差別なくお互いに助け合っていきたい。貧しい人、病気の人、生き物に優しくした。規則もそんなに厳しくなく、無理のないようになっていた。日本と違って困っている人をみんなで助けるという精神がすごかった。（差別もない！）日本も見習うべきだと思った。
- 〈生徒 P〉 人々の生活は、宗教や環境と関わりがありました。そのため、日本とまったく同じ生活をしている所は無いと思います。でも、同じ四季がある国々とは似ていました。これからは、厳しい環境の中で生活している人々のことも考えて生活していくことが大切だと思います。
- 〈生徒 Q〉 今回の交流で、資料集には理屈やわけが書いていなかったことが、理由を教えてもらうことでわかることができた。自分とは宗教の違いはあるが考えていることがとても似ていて、すごく親近感を感じた。
- 〈生徒 R〉 世界の環境に合わせて生活し、それに宗教なども生活に関わっていて、あまり宗教のことについて何かをするという習慣がない日本や自分と大きな差があるということに気付いた。断食などが無い日本は、とても楽な生活だと感じた。
- 〈生徒 S〉 同じ温帯で気候も一緒の台湾と日本の暮らしが同じかということではなかった。だから、私の暮らしも宗教や文化の環境に左右されているのだと知れた。
- 〈生徒 T〉 宗教は国境線みたいにきっちり分かれていないので、いろんなところで色々な宗教がある。同じ宗教同士で分かりあえることもあったり、違う宗教で語り合ったりできると思う。自分達の生活と似ているところもあることを知って、私たちは宗教や気候を通して関わり合っていると思った。
- 〈生徒 U〉 その地域の環境は自分達の生活によって、そうになってしまう部分もあると思う。自分達の生活の結果、悪い方向に進んでしまうのは、良くないと思う。自分達の生活も、気を付けたりした方がいいのかなと思った。また、宗教の面でも、偏見を持っているところもある。そのような偏見は、宗教の人達を傷つけるようなことに繋がってしまうと思う。学んだ知識を生かして、偏見を無くす、しないことも大切では？と思った。

下線部は、多様性が進む社会の中で生きるための資質・能力を育まれていると判断できる記述部分である。信仰する宗教による慣習の違いにある背景や理由を理解し、他者の存在を大切にしながらともに生活する同じ人間として、自分の生き方(ライフスタイル)について内省(自己探究・自己更新)している様子が見受けられる。対話や振り返りの工夫をしながら、単元を進めてきた成果と捉えた。

## 8 研究の成果及び考察

- ・考察シートにおける生徒の記述からは、気候や信仰する宗教による慣習の違いにある背景や理由を理解し、他者の存在を大切にしながらともに地域社会で生活する同じ人間として、自分の生き方(ライフスタイル)について内省(自己探究・自己更新)している様子が見受けられた。生徒の記述分析からは、対話や振り返りの工夫をしながら単元を進めた成果として、多様性が進む社会の中で生きるための資質・能力が育まれたと捉えた。
- ・グローバル化とともに世界各地では多様性が進む社会になっており、そのような社会の中で生活していかなければならないことを生徒が身近なもの実感できるよう、本単元では地域で生活されている外国人の方々に授業に参加していただいた。外国人の方々は、それぞれキリスト教、イスラム教、仏教を信仰されており、出身国もカナダ、ポーランド、インドネシア、韓国、台湾と様々であった。宗教も気候による環境も日本と異なる方々が地域で生活されており、一緒に社会を構成していかなければならないことを、生徒は対話を通して実感することができた。また、生まれた環境や宗教による生き方が異なる人々と、どのような社会を創造し、自分はどのように在るべきかについても対話や単元シートへの振り返りを通して考えを深めていくことができた。
- ・社会科における言語活動の一つである対話は、社会科の学習の中でトレーニングを積み重ねることで技能が向上すると考える。国語科において「話すこと・聞くこと」に関する技能は身に付くが、国語科以外の教科で専門性に関わる対話を行うには、各教科の中で指導を繰り返し行っていかなければならない。本単元では、他者と様々な形態で繰り返し資料や根拠を示しながら対話を行い、単

元末に初めて会った外国人の方々と対話する時間を設定した。生徒は自分の調べたことをもとに質問をしたり、外国人の方々が説明して下さったことによって生じた新たな問いを解決したりしていくことができた。

## 9 今後の課題

- ・対話については、社会科における言語活動を充実させていく視点から、資料などの根拠を明確にしながらか対話できるよう、単元の中で意図的・計画的にトレーニングを積み重ねていけるようにする。
- ・振り返りについては、自分との対話を大切にするという視点から、時間を十分に確保できるようにする。
- ・多様性が進む社会の中で自分の生き方(ライフスタイル)について内省(自己探究・自己更新)し、よりよい社会を共に創っていく資質・能力を育む視点から、実社会で生活されている様々な人を授業に有効に活用しながら実践を進めていく。

### 【文献】

- 新井郁男「教育展望—改めて問う、深い学びとは—」2018年,大日本印刷/安彦忠彦「これからの教育が目ざす深い学びとは」
- 新井郁男「教育展望4月号」2019年,大日本印刷株式会社/石川淳「今日も笑顔で夢いっぱい!創造・発信・協働・挑戦!」
- 新井郁男「教育展望—学びの一貫や系統を大切にしている学校間(異校種間)連携—」2019年,大日本印刷/佐藤真「高大間のカリキュラムギャップの解消と質の高い大学教育の実質化」
- 石森広美「『生きる力』を育むグローバル教育の実践—生徒の心に響く主体的・対話的で深い学び—」2019年,明石書店
- 茨城大学教育学部附属中学校「公開授業研究会紀要」2018年,川田印刷
- 江口勇司,井田仁康,唐木清志他「21世紀に求められる『社会的な見方・考え方』」2018年,帝国書院
- 唐木清志,西村公孝,藤原孝章「社会参画と社会科教育の創造」2010年,学文社
- 佐藤学/木曾功/多田孝志/諏訪哲郎「持続可能性の教育—新たなビジョンへ—」2015年,教育出版
- 杉原麻美「多文化共生社会における協働学習」2018年,学文社
- 多田孝志「対話型授業の理論と実践—深い思考を生起させる12の要件—」2018年,教育出版
- 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会「カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向けて—」2015年,東京大学出版会/市川伸一「第I部第3章 社会に生きる学力」
- 田中耕次・鶴田清司他「新しい時代の教育方法」2012年,有斐閣アルマ
- 奈須正裕「『資質・能力』と学びのメカニズム」2017年,東洋館出版社
- 西山教行/大木充「グローバル化のなかの異文化間教育—異文化間能力の考察と文脈化の試み—」2019年,明石書店/細川英雄「第3章 日本社会と異文化間教育のあるべき姿」
- 村田翼夫「多文化社会に答える地球市民教育—日本・北米・EUのケース—」2016年,ミネルヴァ書房
- 森茂岳雄,川崎誠司,桐谷正信,青木香代子(編著)「社会科における多文化教育—多様性・社会主義・公正を学ぶ—」2019年,明石書店/松尾知明「第2章 多文化教育で育成がめざされる資質・能力」